



令和元年8月

城北中だより

城北中学校教育目標

- 思いやりのある生徒
- 真剣に学ぶ生徒
- 健康な生徒

生徒数

1年	173名
2年	156名
3年	176名
特別支援学級	6名
全校生徒数	511名

誰もが

校長 玉崎 芳行

“ねえねえ どうして とまとさんはあかいの？ ばななさんはきいろだよ ねえ なんて？”
 晩夏夕暮れ時のスーパーで、おさな児の瑞々しい感性の最たる『なんで なんで アタック』に触れた。
 親御さんは、困りつつも慈しみに満ちた眼差しを我が子に向けた。ふたりの姿が、やんわりと滲んだ。

“おはようございます！” “おはよう！”

(私の場合、ご近所の方と交わす挨拶は、平日と休日では、時として相手が異なる。顔見知りの4歳の彼女は、休日の朝に顔を合わせることが多い。)

“えらいなあ いつもいつも元気に自分からあいさつができてすごいなあ！元気をくれてありがとね”
 必ず、彼女にお礼を返す。彼女は、はにかみながら親御さんの顔を上目遣いでちらっと見る。親御さんは、優しく微笑んでいる。親と子のふたりだけが分かり合える声なき声が、確かにそこにあった。

子どもたちが大人となって生き抜く社会は、いったいどうなっていくのだろう。グローバル社会、AI社会、そして「Society5.0 (ソサエティ5.0)」時代へ。

それでも、“人が人をはぐくむ”という営みには、不易のものがあるはずだ。

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる

とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる

不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる

「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもは、みじめな気持ちになる

子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる

親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる

叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう

励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる

広い心で接すれば、キレる子にはならない

褒めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ

愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ

認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる

見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる

分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ

親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る

子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ

やさしく、思いやりをもって育てれば、子どもは、やさしい子に育つ

守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ

和気あいあいとした家庭で育てば、子どもは、この世の中はいいところだと思えるようになる



子どもたち誰もが人生の荒波にもまれても挫けず、希望をもって生きてほしいという願いを込めて…
 ドロシー・ロー・ノルト (石井千春=訳) の詩から